りびんぐらいぶず 平成22（2010）年7月第3号

着実な道行き

◆はじめに

ご本山の参拝志納部からお便りが届きました。御門徒の中でこの半年の間に御本山に念仏奉仕のご縁を結ばれ帰敬式（おかみそり）をお受けになった方のお知らせでした。

前第十一期の組連研を修了され、組の仏婦念仏奉仕にご参加戴いた方々でありました。

連研修了後は中央教習を経て門徒推進員となって戴くのが本来ではありますが、ご婦人方には三泊四日の中央教習はなかなか容易ではありません。ですが、連研を経て念仏奉仕のご縁に遇われ、お剃刀を頂戴して戴けるとは何と着実な道行きでありましょうや。

この皆様は毎月の例会にも大変熱心にお参りになります。例会では、今、来年の親鸞聖人七百五十回忌を控えて「宗祖讃仰作法」を練習しています。作法は、親鸞聖人が晩年に著されたご和讃で構成されていますので、知らず知らず如来様の大慈大悲のお心に触れて戴くことができます。

組では、第十二期連研が始まりました。当院では今度は男の方がご受講戴く番ですので、今三名の方々がご受講戴いています。そこで改めて思うのです。連研が終わればせめて仏婦さんのように仏教壮年会でも念仏奉仕でお剃刀を頂戴して戴きたいなと。

念仏奉仕でお剃刀を頂戴し生前に法名を戴いたことが契機になって、お聴聞のお育てが始まります。何と着実で素晴らしいことでありましょう。

◆現代の課題

さて、仏説無量寿経にはどのようにしてお浄土に往生できるかの因についての願が三つ誓われてあります（生因（しょういん）の三願）。

その第一が第十九願。今生（こんじょう）でお悟りを得ようとして自力修行を積んできたがとうとう果たせなかった行者に対して、生涯に積み重ねた功徳を浄土往生の功として配慮してやろうとの阿弥陀如来の御計らいであります。

その第二が第二十願。阿弥陀如来のお名号を聞かせて戴いたことが機縁になって、お浄土に心を向けるようになり、浄土往生を確かなものとする為に、お念仏を励んでその功をもってお浄土に生まれたいとする自力念仏の行者に対して、その功を配慮してやろうとの如来様の御はからいであります。

でもお浄土に生まれることができるかどうかは、この世とお別れするときでないとはっ

きりしません。臨終に弥陀三尊のお迎えがなければ浄土往生は叶わなかったことが明らかになるのですから。

その第三がいつもお聞かせに与っている第十八願であります。阿弥陀如来から手向けられたまことのお心をよりどころに仰せのままにお浄土に生まれたいと思うて、わずか十遍でもよいからお念仏しておくれとの阿弥陀如来のご本願のお心にお任せして浄土往生する途であります。

仰せに従って「南無阿弥陀仏」と称えるとどうでしょう。その途端「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さいます。これはお名号を聞かしめたいとの如来様のお手立てだったのですから、聞こえて下さったお名号は如来様直々のお喚び声でありました。そのお喚び声に喚び覚まされた一刹那に衆生（私）は浄土往生間違いない身にさせて戴けたのでありました。

第三のみちは、凡夫が自ら積み上げる功をもとに浄土往生が決まるのではなく、阿弥陀如来の本願力によって廻向されたお名号のはたらきによるお救いですから、名号聞信のその一刹那に今生において浄土往生間違いのない身（正定聚不退（しょうじょうじゅふたい）の位に就かしめられ今生の命が終った途端にお浄土に迎え取られるのであります。

このように浄土往生に三つの道が開かれてあるのに、現代には新たな課題が明らかになりつつあります。

それは、現代人には、お浄土に生まれたいという思いがはっきりしないことであります。

開国以来およそ百五十年、戦後六十五年の間に科学的教育を受けて育った現代人の思考回路は、ものごとがあるかないかで考えようとします。お浄土を考えるときにもこの思考回路が働きます。

「お浄土はあるのかない」のか、「ない」のなら私は信じません。「ある」というのなら、この目で見えるように見せて下さい。

これに対して、「みせられない」というと、「ほらみたことか、この目で確かにみえないものは信じようがない」というのが現代人の思考回路です。

でも一方で不思議な会話が特にテレビ報道に登場します。

亡くなった人は「天国に行って、天国から私達を見守っていてくださる」ことでしょう。

これが典型的な会話です。

でもねえ、そういうときの天国というのはどのような国だと確かに説明できるものでしょうか。果たしてこの目で見ることができるものでしょうか。「この目で見えないものは信じようがない」と言っている現代人が自ら同じ咎（とが）を犯して平然としています。

たとえ、目ではみることができなくても自ら納得して発言しているのでしょうか。これは、

テレビカメラを向けられた時のその場しのぎの格好を付けた表現でしかありません。

本格的なキリスト教徒でもない限り、天国に行く、等ということはまた、なんとたよりないことでありましょう。

◆お浄土は無為涅槃界、浄土往生は無生の生

お浄土は、迷いの眼に見えるような世界ではありません。その本質は、いろもなくかたちもなくまします。阿弥陀如来のお悟りの世界そのものです。

でもそれでは雲をつかむようなことになるので、如来様は真実の世界から法蔵菩薩と現れ給いて五劫の思惟（しゆい）を重ねられ十劫（じっこう）の修業を経てお名号と仕上って下さったのでした。

お名号の「号」とは、阿弥陀如来がお悟りを開かれた後のお名前であります。

迷いの世の衆生（私）にお喚び声になって迫って下さる。迷いの世にまどろむ衆生（私）を喚び覚まそうとして大声で喚び続けて居て下さるお喚び声だったのです。

お喚び声は「ワレヲタノメ、ワレニマカセヨ」とのお心です。そのお名号を十方世界の迷いの衆生に確かに届け聞かしめる為に、如来様は「乃至十念（ないしじゅうねん）」のプラクティカルな修法をお与え下さったのでした。

ですから「南無阿弥陀仏」とお称えするとき、ただちに「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さるお名号こそは、如来様が衆生（私）に聞かしめたいとお手立て下さったお心なのですから、聞こえて下さるお名号は、阿弥陀如来そのお方だったわけであります。

私達は、お喚び声を通して毎日、如来様に遇わせて戴いていることでありました。合掌

◆正覚寺仏壮例会　毎月第一日曜日午後八時より
◆正覚寺仏婦例会　毎月十六日午後七時半より
著作編集兼発行元（本願寺派　正覚寺内）
〒520-0501 大津市北小松四五二番地　**電話＆FAX　596-0166**　住職　堅田　玄宥